

論文の和文要旨

論文題目

ビルマ古典歌謡におけるジャンル形成

—18—19世紀のウー・サの創作を中心として—

氏名

井上さゆり

本稿では、ビルマの古典歌謡として位置づけられ、大歌謡と総称される作品群におけるジャンルが、どのように形成されるのかについて明らかにした。特に、歌謡集編集、音階構造、創作技法、ミャワディ卿ウー・サ (Myawadi Mingyi U Sa 1766—1853、以下ウー・サ) という作者の、四つの視点から、パッピョーと呼ばれるジャンルの形成過程に焦点をあてて検討した。

まず本稿では、大歌謡におけるジャンルについて、次のように捉えた。歌謡作品に使用されるいくつかの指標があり、それらの組み合わせがジャンルを定義するとされているが、歌謡作品はときに指標を変える。つまり、自らのジャンルを変えることができる。現在でもこのようなことが起こる作品については、従来、「ジャンル内」での「例外」として捉えられてきた。しかし、これは、ジャンル区分が作品群の連続の上になされた結果生じた、境界上の作品ともいえるべきものであり、いずれかのジャンルにおいて創作された「例外」作品ではない。本稿ではこのような作品を、「両義ジャンル」作品と呼んだ。そして、ジャンルについて考えていく際には、ジャンル自体の定義の問題と、個々の作品を特定のジャンルに帰属させる行為は別の次元での問題であることを設定した。現在のジャンル観は、個々の作品をジャンルと一対一の関係にあるものとみなし、ジャンルは作品の指標から定義されるものとみなしてきた。しかし、本稿では、個々の作品はジャンルの指標に対して自由な位置にあると考えた。

一方で、特定の指標の組み合わせが類型化する。それは、「既存の作品」に依拠していく技法が、創作の根底にあるためである。ジャンル形成は、指標の組み合わせを自由に選ぶ行為が起こることと、指標が類型化していく流れから説明できる。指標の類型化が、ジャンルとしての認識を引き起こす。

以上が、本稿が捉えた、ジャンルである。そして、このことを、以下の順で論証した。

まず、ジャンルが固定した境界を持つものと捉えられている見方の背景にある、歌謡集でのジャンル区分の妥当性を検討した。従来の研究で用いられてきた刊本だけではなく、貝葉及び折り畳み写本における歌謡の記述を見ていくと、作品とそのジャンルの帰属は最初から定まっていたわけではなかったことがわかった。

確認できた歌謡集の原本年及び写本年は、1788年から1917年にわたる。それらの貝葉

の分析を通して分かったことは次のとおりである。1788年から1869年にかけての歌謡集は、歌謡に相当するものを包括するかたちではなく、特定の範囲の歌謡を編集するか、個人の歌謡を集めた形で編集されていた。そして、それらの中では、ジャンルごとに作品を整理するということは行われていない。

歌謡集編集がジャンル区分によって構成されるかたちになったと考えられるのは、1870年以降である。1870年の貝葉『歌謡の題名集』において、歌謡が目録化されているのを初めて確認することができた。これ以降の貝葉も刊本も、『歌謡の題名集』でなされた分類とほぼ同様に、ジャンル区分を行った上で作品をそこに帰属するかたちで記述していた。ジャンル区分は歌謡集編集が繰り返し行われる中で為されていったものであり、その区分が妥当なものであるのか検討の必要がある。そこで、あるジャンルを定義するとされる音楽面でのいくつかの指標とジャンルとの関係には妥当性があるかを検討していった。

ジャンルを成り立たせるとされる指標は、1) 調律種、2) 拍子、3) 特定のジャンルに属する作品に頻繁に使用される旋律、4) ジャンルごとに定まった前奏、5) 後奏の5つである。さらに、ジャンルによっては、歌詞内容や歌詞の形式によってジャンルが定義されているものもある。しかし個々の作品をみていくと、あるジャンルに含まれるとされる作品の中には、そのジャンルの指標とされるものから「逸脱」するものが見られた。このような作品は、ジャンルとジャンルの間が断絶したものではないことを示す作品であると考え、筆者はこのような作品を「両義ジャンル」作品と呼んだ。

指標の選択は、従来の研究が扱ってきたように、作品に内在する面もある。つまり、予め、指標にもとづいて作られた作品である場合には、その指標の交代は困難である。それは指標が時間軸の中で多様化していくことによって、作品が作られた時期の距離が離れた作品は互いの指標を交換しにくいといえる。しかし、時間軸の中で隣り合うジャンルを作品から見ると、ジャンルとジャンルの間にははっきりとした境界はないことが分かった。にもかかわらず、ジャンルという解釈が起こるのは、解釈を起こさせる類型作品が存在するためであると考えられた。

その点を、創作技法の分析によって検討した。まず、弦歌を含む「古い歌」を掲載した『モンユエー僧正の古い楽曲集』における作品の題名を中心に見ると、題名が同一の作品、類似の作品が多数見られた。これらの分析から、ある特定の作品の題名を用いて創作を行う方法が技法のひとつとして確立していることが分かった。

また、「アライツ」と記載されている題名が頻繁に見られることに注目した。「アライツ」は旋律の意味であり、既存の作品の旋律を利用し、歌詞を付け替えた作品であることを示す。いわゆる、替え歌と同じ技法である。そして、「アライツ」として歌詞を新たにし他作品にはもとの題名が残された。そのことは、元歌の旋律を示す手段であると考えられた。また、「アライツ」として作られたと考えられる作品に、題名に「チョー（弦歌）」とあるものも多数見られた。このことは、ある元歌に別の歌詞がつけられた際、その旋律が「型」として認識されたことを示し、その際に「チョー」というジャンル名を付されたことが考

えられた。

一方、作者を見ると、弦歌の作者の中では、年齢的には中ほどの位置に位置づけられたウー・サが、パッピョー作品の作者の「アライツ」の作者の中では最年長であった。ウー・サはパッピョーに多くの作品を残しているにもかかわらず、「アライツ」として作ったものは少ない。そして、他の作者がウー・サの作品を元歌として、多くの「アライツ」を作っていた。ウー・サはパッピョーというジャンルにおいてはほとんどオリジナルな作品の創作を行っていたことが指摘できる。

ウー・サは、自身の創作の中で、後にパッピョーとされていく作品をどう捉えていたのかを、ウー・サ自身が1849年に編集した『ウー・サの文集と歌謡集』における歌謡ジャンル概念について検討することでみていった。1870年の『歌謡の題名集』における歌謡ジャンル名の多くは『ウー・サの文集と歌謡集』の中にも見ることができた。一方、ウー・サが創作の出発点に位置づけられたパッピョーや同時代に現れたと考えられるアユタヤ歌などにおいては『ウー・サの文集と歌謡集』の中にジャンル名は登場しなかった。つまり、ジャンルとしては認識していなかった。

そこで、どのようにパッピョーというジャンルが形成されたのかを、パッピョーの作者と、貝葉におけるパッピョーの編集の二点から、パッピョーの形成過程を検討した。

『歌謡の題名集』(1870)、『大歌謡の世界』(1881)、『著名歌謡作品全集』(1917)でパッピョーと分類されている作品の作者を見ていくと、生没年もしくは活躍年の分かる作者の中ではウー・サが最年長で、作品数が非常に多い。パッピョー作品全体の作者の中ではウー・サが最年長であり、他の作者は、ウー・サより17~67歳離れていた。

先にみた、創作技法とあわせて上記のことを考えてみると、次のような創作過程が推察された。創作は、「既存の作品」にもとづくことが根底にある。ウー・サが自身で「タンザン(新奇な音)」と呼んだ、既存の作品との差異の大きい作品が蓄積されたとき、ウー・

次に、『ウー・サの文集と歌謡集』(1849)、『歌謡の題名集』(1870)、『大歌謡の世界』(1881)、『著名歌謡作品全集』(1917)の四点の貝葉を比較し、パッピョーの編集過程を見た。『ウー・サの文集と歌謡集』掲載の作品のうち、『歌謡の題名集』でパッピョーとして分類されたものはほぼ全て、『大歌謡の世界』、『著名歌謡作品全集』でパッピョーとして分類されていた。

また、『ウー・サの文集と歌謡集』に掲載されていないにもかかわらず、『大歌謡の世界』と『著名歌謡作品全集』でウー・サのパッピョー作品として掲載されている作品が多く見られた。これらは、ウー・サの作品に依拠して作られた、他人の作品であると考えられた。

以上見てきたことから、パッピョーというジャンルは、ウー・サの作品によって軸が作られて、それが他の作者に踏襲されることによってジャンルとして認識されることになったということが指摘できる。しかし、一方で、写本間でジャンル区分が一致していない作品も多数見られた。これはおそらく、前述の「両義ジャンル」作品であり、歌謡集編集の過程でいずれかのジャンルに押しやられることになったものと考えられる。このことか

ら、パッピョーというジャンルは、その領域の持つ「両義性」が、歌謡集編集の過程で後景化されていき、ひとつの領域を形成するものとして提示されることによって形成されたといえよう。

以上、本稿では、パッピョーというジャンルを中心に、歌謡ジャンル形成について検討してきた。ビルマの大歌謡におけるジャンルとは、創作の流れを命名しようとする「動き」であり、自身の中に歴史を内包する「過程」である。そして、ジャンルとは、特定の指標によって定義されうるものでも、作品によって定義されうるものでもなく、絶えざる解釈を伴う類型化への志向であると捉えた。